

## 【コンペティションI 総評】

今年は130組の応募から5カ国8人の振付家がファイナルに進んだ。例年以上にどの上演も技術が高く、極めて丁寧に準備された印象を持った。審査員賞を含む3賞を受けた高瑞貴は、輪郭の明快な振付を力と速度の緩急を付けてミニマルな明暗の世界に解き放ち、生命の物語を紡いだ。同じく複数の賞を受けた大森瑤子はバレエやストリートダンスの多様なムーブメントを引用・リミックスし、ぬいぐるみの熊に恋する少女の複雑さを軽やかに描いた。それぞれ異なる方法で関係の暴力性を浮き上がらせたジ・ジエ、パク・スヨルのデュオには、切実な美しさがあった。クアラルンプールの喧騒を身体に移したモハマト・ズルカーナイン・ビン・ズベルの新鮮なムーブメント、受賞は果たさなかったがダンスと日本舞踊を掛け合わせて新たな表現に挑む永野百合子にも可能性を感じた。来年ダンスコレクションは30周年を迎える。ダンス・振付の枠組に囚われず、音楽と美術の持つ力を吟味し、今以上に自由な身体に対するアプローチを期待している。

岡見さえ（舞踊評論家、共立女子大学文芸学部准教授）

ハイスピードで心拍数上がるダンス作品が並んだ今回の審査。複雑な動きも難なくこなし、鍛え抜かれたダンサーたちによる文句なしのアイデア満載のダンス展開は、十分な見応えと楽しみに満ちていた。高瑞貴の『doldrums』では、静かに脈打つ定型詩のような時空を生むダンス力に強く魅了された。そして、詩の世界を打ち破る我が身を放棄するような鋭利な動きは、不意に、見る者が自身の身体の質量をも、否応なく感じる、息を呑む瞬間だった。ユニークな振付と作品構成を展開した大森瑤子の『Instant』は、非常に高度なダンス力の先へと進もうとする挑戦を感じる意欲作。今後がとても楽しみになった。パク・スヨルの『dating abuse』では、緻密で躍動的な振付が圧巻であったが、強靱なダンサー Lee Hyun Ji の魅力は作品を凌駕していた。今回の作品並びでは異端児としての光も放った永野百合子の『雨粒拾い、屋上にて。』は、振付、構成共に、次への予測不可能な期待が膨らんだ。

審査時間が文字通り「ダンスを楽しむ」時間であったことに、改めてファイナリストの皆さんに感謝を申し上げたい。しかし欲を言えば、全体的に、作品時間の短さ、意表を突くアイデアの欠如には少し寂しい気持ちにもなった。ダンスという、あるようでないような枠にとらわれず、こだわりを粘り強く追求し続けてほしいと思う。

北村明子（振付家、ダンサー、信州大学人文学部教授）

今回は、コロナ以降の本来のありかたである通常のライブ開催となった。ビデオ審査の段階を思い返すと作品づくりの着眼点、意外性などの幅は少しかけていたかもしれない。そして12月、8人の作者が無事横浜に集結できた。巧みなコンタクトワーク、高速のダンス、ポップな思考、予想よりも上回る形でたまたまかもしれないが全体を通して密度がたかく、「振付」という視点でも甘味な時間、「ゆるさ」は少なかった。その分見入ってしまう強さはあった。作品の長さは難しいところだが、作品後半が一定のリズムから崩れない傾向はあった。ただ数年前のアジア諸国の作品のあり方から比べると飛躍的に成長した。絵で言うとドローイングの種類が増えた感じだ。アジアのダンスの可能性はちゃんと上がってきている。その中で、高さんらの披露したストイックかつ精度のある磨いたムーブメントの心地よさも感じられた。演劇性よりもより舞踊言語のムーブメントに傾いたそんな感触であった。他分野では表現しきれないダンスの魅力をこれからも探求していければと思う。ついでもう一つ。みなさんの作品づくりの先にもうひとつ、「ダンスは続くよ！どこまでも」的な時間のかかる対話、楽しみ方のようなものを長い目で築き上げられればと思う。

近藤良平（コンドルズ主宰、振付家、ダンサー、彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督）

今回、映像や美術を用いずに肉体のみで勝負する作品ばかりが並んだことが、何よりもうれしかった。映像も、美術も、あくまで身体の変現を拡張・深化するために用いられるものであって、ダンサーの身体こそが核だからである。

いずれも緻密に構成された振付だったが、審査員賞の高瑞貴『doldrums』は、無音のなか、彼女の強度ある身体が舞台空間を支配した。フランス大使館賞の大森瑤子は卓越したダンサーであり、自分が自分でなくなっていく特異な人形振りが時空を歪めていく。2人とも次はどんな変現を見せてくれるか楽しみでならない。パク・スヨル『dating abuse』は女性ダンサーの存在感が際立ち、ジ・ジエ『Nowhere to turn』はスリリングな前半がとりわけ心に残る。永野百合子『雨粒拾い、屋上にて。』はコンテンポラリーダンスと日本舞踊のユニークな融合の試みで、今後の展開に期待がかかる。

今回日本から出場した3人はともに新人振付家部門であるコンペティションIIの受賞者である。その後、こうして創作を続け、経験を積んだ上で今回それぞれ注目すべき変現を見せてくれたことが喜ばしい。

浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）